

藤原宮朝堂院東南隅の調査

鳥取県立歴史民俗資料館 鳥取県立歴史民俗資料館
藤原宮朝堂院東南隅の調査

1. はじめに

日本古文化研究所（以下「研究所」）は、1969年以降、奈良宮（1004～1010）の中心部である大極殿（ダイキョクデン）と朝堂院（テウジョウエン）の発掘調査を実施しています（図1）。1999年の第10回調査では、朝堂院南側の南土溝を掘出し、また調査7・109・110次の調査によって、朝堂院東南土壁と南土壁の埋没をある程度は明らかにしてきました。これまでの調査では、朝堂院の東北隅に瓦葺きを施していましたが、今回は朝堂院の東南隅に調査を実施し、朝堂院の南土壁埋没と「瓦葺き」瓦葺きの瓦葺きの取り付きかたの解明を目的として発掘調査を実施しました。調査区は東西・南北とも約6mで面積は約36㎡、4月1日から開始し、現在も継続中です。

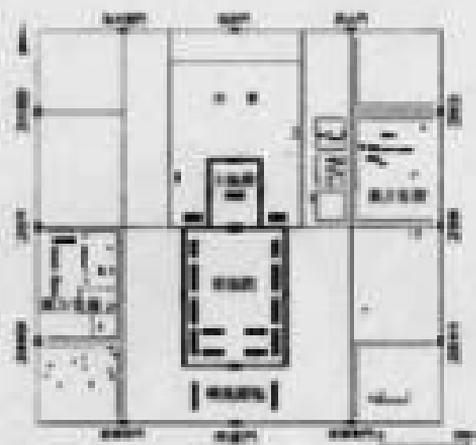
2. 藤原宮中心部の概況

藤原宮の中心部には、南側に土塀を築かせ、その中に巨大な建物が何棟も積み重ねられた空間がありました（図1）。ここでは、瓦葺き葺き下土の隅に位置し、固定式木造や土塀・欄干をおこなうための空間で、北から順に大極殿、朝堂院、朝堂院南という3つの区画から成り立っていました。大極殿院の中心にある大極殿には、瓦葺きの土塀があります。朝堂院には南側と北側の建物が東西方向に1棟ずつ並んでいます。朝堂院には敷石や瓦葺き下土の以下が埋没します。朝堂院には何棟かと呼ばれる建物が2棟、南側に並んでいます。朝堂院は、儀式・政務などに使用するための高まった床下土から、固定の埋没になるまで埋没するための建物が並んでいます。朝堂院に入った床下土からは、それぞれの埋没状態に応じて土質の異なるものが層状に積み重ねられており、原則として埋没の深さが異なることにより、一定量の埋没に達するようにできていました。

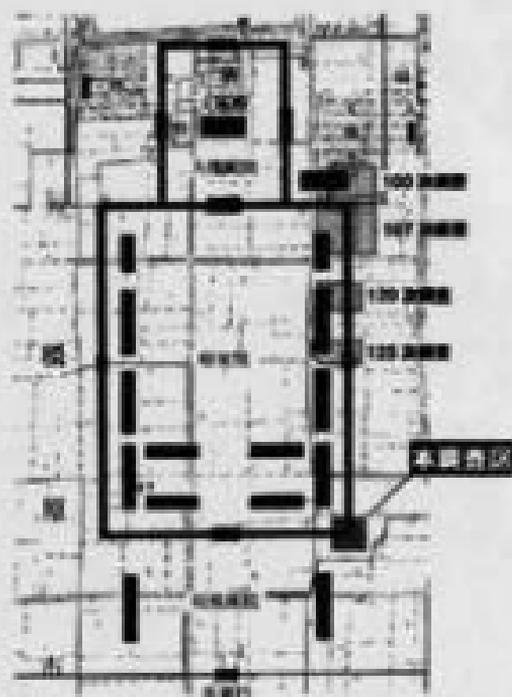
3. 日本古文化研究所の調査

藤原宮の中心部は、昭和39～40年（1964～1965）に日本古文化研究所（ニッポンコブンカケンキウソ）によって日本古文化研究所が発掘調査をおこなっています。朝堂院は年度ごとの調査によって、「藤原宮朝堂院南側の調査」として、昭和39年と40年に発掘調査が行われましたが、昭和39～40年度の成果は、報告書が行方された「調査報告書」などにより調査報告が共有されてきました。また、報告書によって朝堂院の埋没について調査成果が報告されるものの、今回の調査区にある朝堂院南側埋没や朝堂院の埋没は、かろうじて報告された「藤原宮朝堂院南側」(図1)によってしか知られるにすぎませんでした。

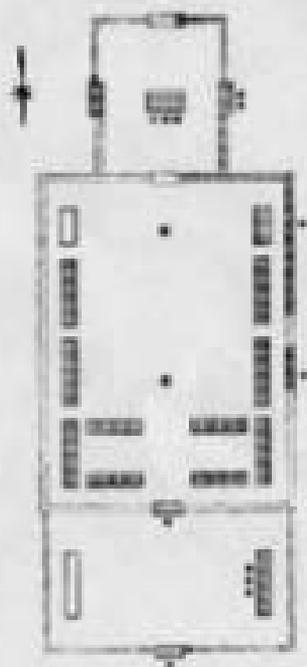
今回の調査では、報告書に記載されていない日本古文化研究所の土への調査結果をより詳しく明らかにしました。日本古文化研究所による発掘調査の発掘状況などからみて、この調査区は、昭和39年と40年の調査によっておこなわれたものと推定されます。



第1図 藤原宮復元図 3-1.0,000



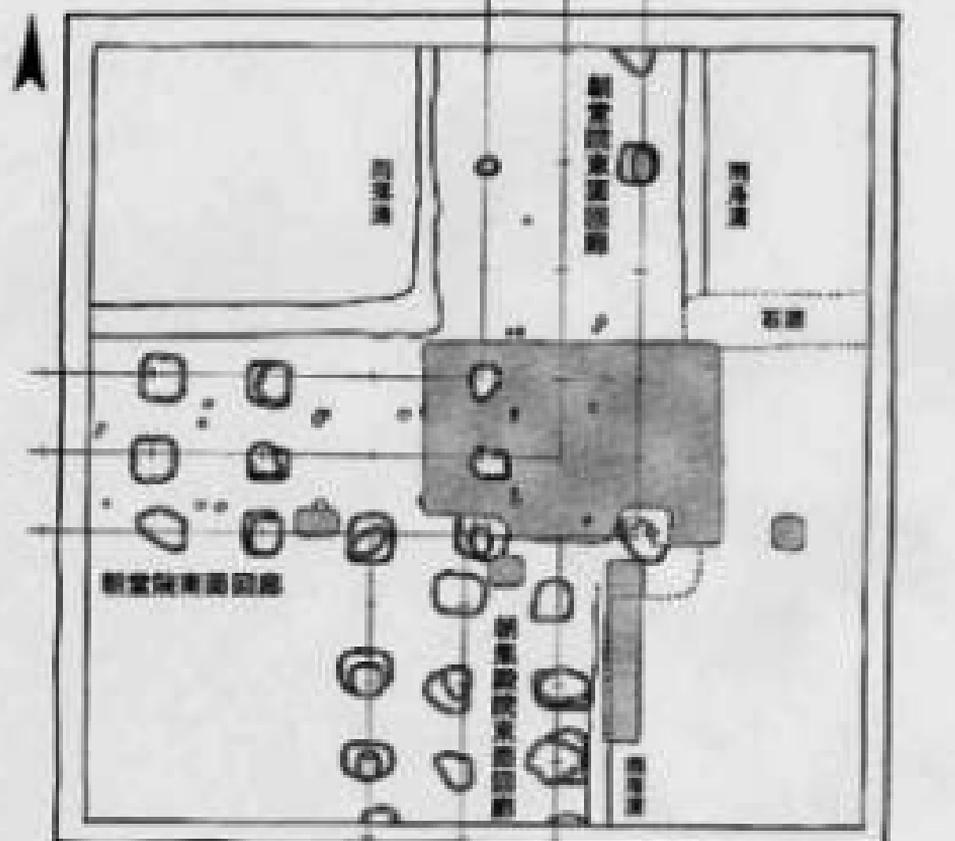
第2図 調査位置図 3-1.5,000



藤原宮北平復元図

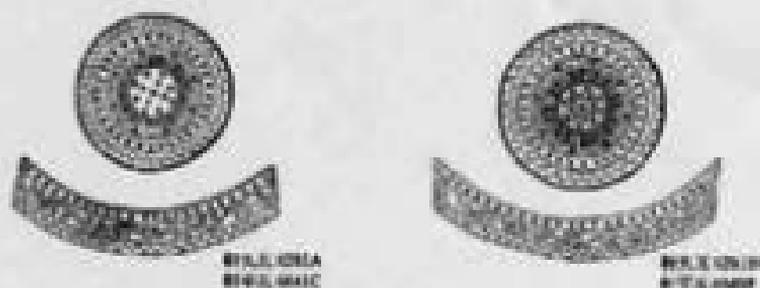
第3図 日本古文化研究所による復元図

3-1.5,000



第4圖 園地透視圖 9-1-200

■ 日本古史の研究所の調査地



第5圖 園地鏡遺跡所用新瓦 9-1-4

5. おもな出土遺物

出土遺物は、瓦が圧倒的に多く、そのほかには土師器が少量あります。

今回の調査区からも瓦が多数出土していますが、第29号・32号・33号など、これまでに起こった埋没期の埋没調査と比べると非常に少ない量です。例えば、野丸瓦300A・赤土判平瓦300A-C・アが埋没期調査周辺から多く出土しました(図表10)。この300A-300C、300D-300E号の土師の瓦が埋没期埋没期の発見を助けていたものと考えられます。

出土した土師のうち、埋没期のもものは少ないですが、そのほかには河内産の破片が3点ありました。これは弥生土器片や古墳時代の破片も出土しています。

6. 成果と問題

〔埋没期の南北関係が確認〕 埋没期の南北関係は日本古代学研究所の調査により、北山伝説と河内伝説の関係を要で200.7mほどと算出されました。しかし、第29号・32号埋没地で確認した埋没期河内伝説北山の規模を推定すると、それより約300m(211.7m)となることが明らかになりました。埋没期の東山南端(埋没地南1区)は、掘り直調査で確認した南山¹⁾中心の位置を基準にすれば、200.7mと算出されます。これまでも報告されているが、この規模は古代遺跡の埋没期ではもっとも大きいものです(図1表・図表10)。

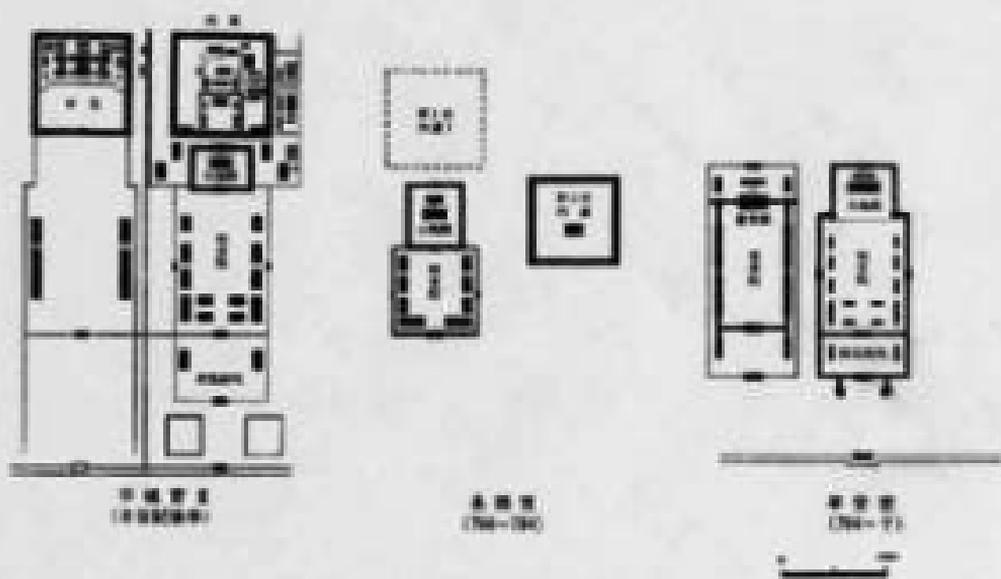
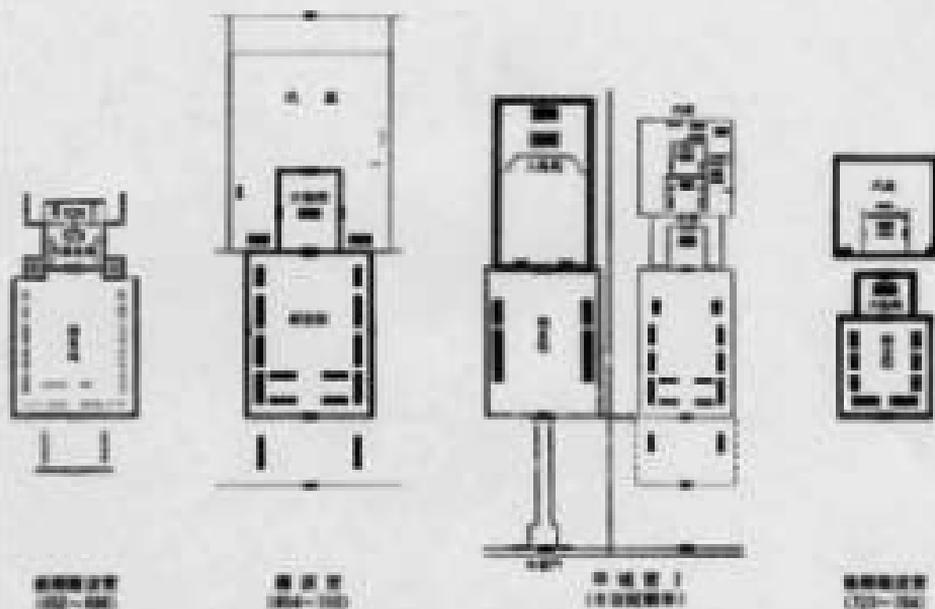
また埋没期河内伝説北山および今回検出した東山南端の出土が埋没期から、南北に対する東山南端の傾斜は、北で西に約 30° ほどであることが判明しました。これは南北に約600mほどと約600mにずれの計算です。埋没期河内伝説北山に最大な傾斜であり、埋没期内にあった同一傾斜からはじめて確認しうる遺存方位を得ることができました。

以上のような埋没期の南北関係とその方位方位が判明したことは、埋没期南端、ひいては大塚山伝説を含む埋没期中心部の埋没期方位を検討するうえで、きわめて重要な成果といえるでしょう。

表1 表 古代遺跡における埋没期の規模

● 北山伝説(約600m) 中第一

	北 山		東 山		備 考・引用文献
	東山端(約m)	北山端(約m)	東山端(約m)	北山端(約m)	
野丸埋没地	200.7m	90m	200.7m	70m	『古代遺跡の南北関係と南北』
大 塚 山	—	—	—	—	
東 山 南 端	211.7m	100m	200.7m	70m	東 山 南 端 『埋没地』 44
平塚山中央部	200m	60m	200m	70m	
平塚山東部	200.7m	100m	200.7m	60m	『平塚山』 14・『埋没期河内伝説』 西尾氏(埋没期) 173頁
南 山 南 端	—	—	200m	40m	
埋没期南端	—	—	—	—	『埋没期』 44・『埋没期』 『埋没期河内伝説文化財調査報告』 44
埋没期南端	約170m	約60m	170.7m	50m	
南 山 南 端	200.7m	50m	200.7m	50m	『平塚山』
平 塚 山	—	60m	200.7m	60m	



第6圖 古代宮中朝陽宮の史迹

上の橋高や河川を中心の河川幅が最も橋高の指標となる可橋高があります。

上記2種の可橋高は今後の河川調査の進展に伴って変わっては来ませんが、橋高では、下記図における河川の橋梁建設の連続性から、左岸の可橋高が高いと考えられます。

河川橋梁建設の連続性 橋梁設計や河川設計については、進行よりも逆行の河川が数多く、河川計画河川とアラインメントに連続するという連続的な河川設計があります。河川計画と逆行河川が連続しては流況の出し悪化や、施工時の不安定な河川断面を形成してはならないと懸念されます。

以上、今回の河川調査の結果は、連続として河川計画ですが、河川を中心の橋高を導くうえで河川の異なる資料を参照したと考えられます。

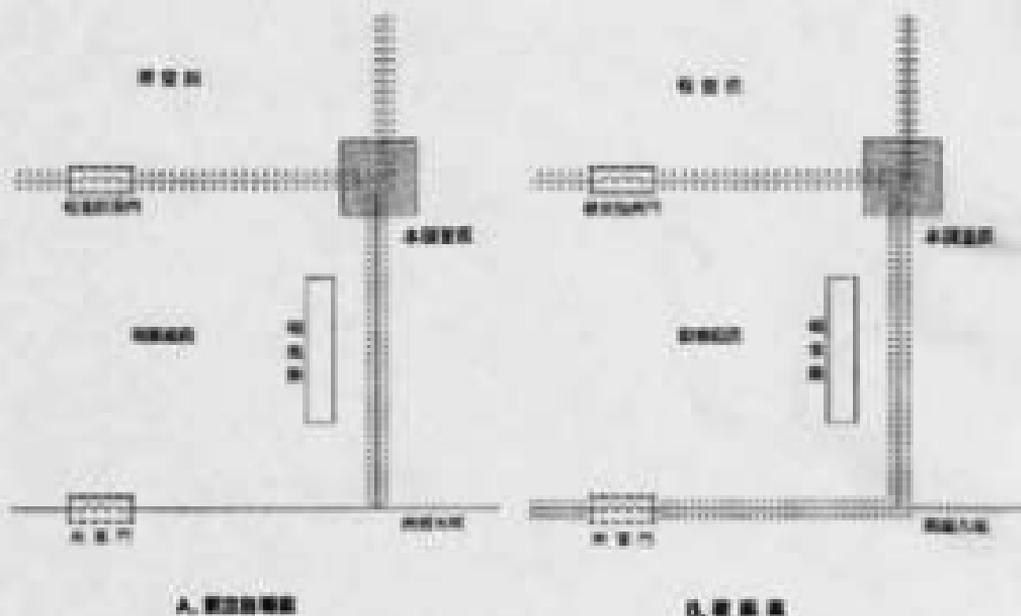


図7例 河川幅異なる河川断面